

# 乳幼児期における社会的人間関係の理解 に関する一考察

爾 寛 明

A Study of Understanding Social Human Relations in Infants and Young Children

Hiroaki Sono

## Abstract

One of the most important points in the human rights education for young children is how to recognize the influence of adults. The discrimination is caused by the power balance among the adults. The recognition among various groups is the prime cause for discrimination. In this study I tried to show how children get the sense of value of social human relations.

Children learn bias against people through their parents and other guardians surrounding them. I conclude that people around children must realize their influence on the social recognition for young children.

## I はじめに

幼児期における人権教育の最も重要な点の一つは、「人間をどう理解するか」である。「人間の理解」というのは、内面性よりも人間の属性にかかわってくる。差別・被差別の関係は、おのおのがどのような人間集団に属しているのかによって決定付けられる。差別集団に属している人間は、被差別集団に属している人間に対して、否定的な感情を持つのである。この関係は必ずしも絶対的な関係ではなく、常に相対的であり、時間的、空間的に異なってくる。それは、その関係性が自然発生的なものではなく、人為的に作られたものだからである。しかし、常に相対的といっても、その関係が一度作られると、その関係の逆転は難しく、人間の生命の時間として考えれば、長時間にわたるのである。このような長期にわたる決定付けられた関係が世代間を伝播していくのである。

乳幼児期における人権教育においては、人間の関係性の理解がなぜ重要となってくるのかは、この世代間を伝播する関係性が親世代から、子どもたちにも伝わっていくからである。子どもたちは、自分たちの意思とは関係ないところで、おのおのの所属集団間の人間関係を理解させられて、その関係性における行動を実行していくのである。

両者の関係性においては、単に属性だけがクローズアップされるのではない。属性というものは、価値中立的である。例えば、男性という属性や女性という属性は、生物的な分類にしかならない。しかし、そこに、「男性とは、・・・」や「女性とは、・・・」のように、社会的な価値観が付加されることによって、関係性の価値が決められてしまう。社会的操作における属性への価値付与により、差別・被差別の関係性が作られていくのである。作られた社会的な人間の関係性を無意識のうちに

「絶対的なもの」として受け止めることによって、世代間に伝えられていくのである。

したがって、乳幼児期において子どもたちがどのように社会的な人間の関係性を理解していくのかについて明らかにしていく必要がある。

## II 問題の所在

乳幼児期における人間の関係性の理解に関しての現在の研究状況については以下の通りである。

- ① 自分と相手との関係がどうであることを認知すること。
  - ② そこにおいて、自分が相手に対してどのような感情や態度を抱いているかを認知（意識）すること。
  - ③ またそこにおいて、相手が自分に対してどういう感情を抱いているかを認知（推測）することが含まれる。
- さらに認知者として、
- ④ 第三者どうしの2者関係、他者関係を認知すること。
  - ⑤ そこにおいて、各人が他の相手に対してどのような感情を抱いているかを認知すること。
  - ⑥ また、そこにおいて、各人が他の相手からどのような感情を抱いているかを認知（推測）することなどが含まれる。<sup>1</sup>

この中でも、特に社会心理学的研究においては②③⑤⑥の情緒的關係についての認知を問題としてきた。

しかし、ここで考えたいことは、①の自分と相手との関係、特に、社会的な関係についてどのように理解しているのかである。社会的な関係とは、例えば、アメリカ社会における黒人と白人の差別関係や日本における男女の性差別関係である。社会における差別的な関係を子どもが無意識のうちに認識して、それらの関係認識を基礎として他の子どもなどとの関係を規定していると考ええる。このような関係についての研究は特に男女の性役割についての研究として、子どものいわゆる「ままごと」などでの性役割のステレオタイプ化などの研究として行われてきている。しかし、それ以外の社会関係についての研究は皆無と考える。例えば、日本においての在日韓国・朝鮮人と日本人の子どもとの関係、同和地区内の子どもと地区外の子どもとの関係、そして同じ会社に勤める管理職の子どもとその部下の子どもとの関係などがある。そのような関係が子どもにどのように認識されて、どのように表出されているのかについて明らかにする必要がある。

### 1. 乳児期の研究

乳児期の研究としてなされているのは、どのように他者を認識していくのかということである。乳児期における対人関係の特徴として挙げられていることは次の通りである。

- ① 他者に対して好き－嫌いの感情を示すようになる。
- ② 自分の母親や周囲の人々を識別できるようになる。

このように乳児期においては、認識と感情が対人関係において示されるのである。

### 2. 幼児期の研究

幼児期における研究としては、交友関係を見ることに重点が置かれている。例えば、ソシオメトリック・テストなどを利用して、どの友達が好きか、どの友達が嫌いかなど、そしてどうしてその友達が好

きで、嫌いなのかといった人間関係のみを考えた研究がなされているのである。

幼児期における人間関係の特徴としては以下の通りである。

- ① それまで母親やその周囲の人々に限られていた関係が、友達などに広がってくる。
- ② 嫉妬心が現れる。
- ③ 言葉で感情を表現する。
- ④ 友達関係において好き－嫌いが始まる。

幼児期も乳児期と基本的には同じで、認識と感情が対人関係において示されるのであるが、それが言葉という手段によって、明確になり、また人間関係においても広がりを持ってくるのである。

以上の研究から見ても、乳幼児期がどのように対人関係の認識を深めていくか、もしくは、変化していくかということに絞った研究がなされており、その人間関係におけるバイアスの取得ということには触れられていないのである。

したがって、乳幼児期における対人関係の認識についてのプロセスが不明であることが問題であると考ええる。

### Ⅲ 研究の目的

日本社会における人間関係は、コミュニケーションをとる上で、重要な役割を持つ。私たちが初対面の人に会ったときは、まずその人の属性を意識することがある。例えば、年齢、既婚や未婚、職業などである。その対人属性の意識は、その場の雰囲気を決め、その場で用いる言葉を確定するものである。特に、日本人は相手との関係により用いる言葉を変えていく。人間関係における立場が相手の方が自分と比べて上位であると認識した場合は、敬語を用いなければならない。また、比較的对等であると理解したときは、敬語の使いすぎはよそよそしく感じられてしまい、人間関係における心理的な距離感を持たせてしまうことがある。このような人間関係の上下性がはっきりしない場合は、会話自体にぎこちなさが感じられることもある。したがって、日本社会においては、互いの属性を理解していることが、円滑なコミュニケーションを図るために必要なことである。

日本社会においては、年齢や性別、職業、学歴などの様々な人間の関係性を規定する属性が存在している。しかし、属性というものに相互の優劣性というものは存在していない。その優劣性を規定してしまうのは、日本人の意識の中に、属性での優劣性を規定する要因が含まれているからであると考えられる。そのような優劣性においては、活字的情報により理解されているのではなく、日本社会の中で、経験的に学習されていると考える。日本社会においては、無価値的な人間関係においては、かかわる人間の属性により、人間関係に別の価値を付加しているのである。そこで、本稿においては、人間は、人間関係における優劣性をどのように理解していくのかについて考えてみたい。

### Ⅳ 対人認知

#### 1. 諸類型

対人認知自体においてもいくつかの類型が示されている。ここでは、2つを紹介したい。

- (1) Gage & Cronbach による類型 (1955) は、「他の人を正確に認知する能力」というような

ことであり、①相手についての手がかりが多いか少ないかにより意味が異なる。②相手がよく知っている人であるのかどうか。この2つの要因の組み合わせにより、次のような3つのパターンに分類した。

- a. 過去の経験に基づいてその人に関するこれこれのイメージを持っているという場合。
- b. 眼前の人をよくよく観察してその特徴を見て取るといった場合。
- c. 少ない手がかりからある人の特性を理解しようする場合。

(2) Warr & Knapper による類型 (1968) は、①媒介的コミュニケーションの有無。②相手との相互作用の有無。③手がかりとなる相手の行動が生起した時期。この3つの要因を組み合わせでカテゴリー化した。<sup>2</sup>(図1)

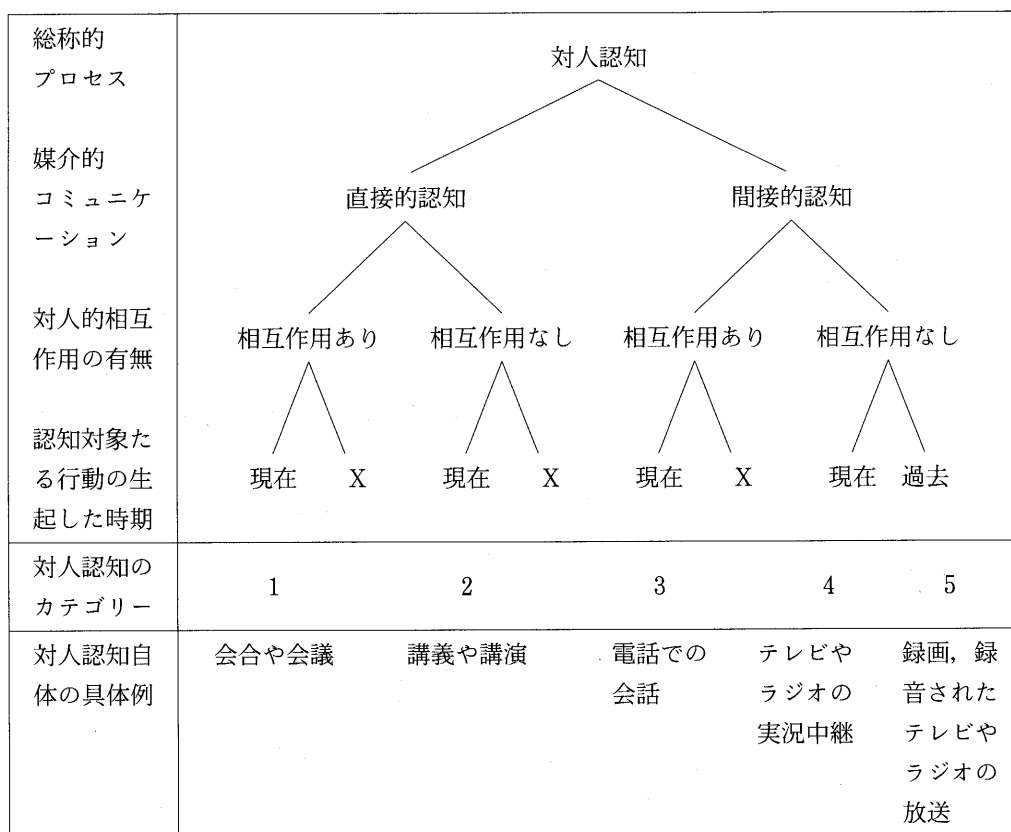


図1 対人認知の諸類型 [Warr & Knapper, 1968]

## 2. イメージの形成

人間は他者について特定の側面に注目して、情報を集めるのである。そしてそれを基にして全面的なイメージを形成するのである。Ash (1964) における印象形成に関する研究においては、「暖かい—冷たい」という次元が中核的なイメージを持つと主張している。ある人物の特徴を示すためにいくつかの形容語が与えられていて、その形容語の中に「暖かい」と「冷たい」という語が含まれていることで、その人物の全体的印象が決定的に異なったものになることを見つけ出したのである。

どのような側面に関心を持つかということは、個々人の持つ欲求や価値観をそのまま反映したものと考える。人が他者のある側面に対して特に関心を持つということは、何よりもまず、他者のその側

面がその個人の基本的な欲求満足になんらかの形で関連性を持っているからである。

### 3. ステレオタイプ

人間はすべて同じイメージを持つものに対しては、「同じ者である」といったステレオタイプの判断をしがちである。Sabin (1920) はこのステレオタイプに基づく推論の過程を対人認知の本質としてとらえ、次のような6層から構成されるものと説明する。

- a. 判断者の仮定体系、すなわち暗黙のあるいは明白な諸前提
- b. 仮定体系から導出された主要な演繹的前提
- c. 主要前提に関連した事象と探索と観察
- d. 1つの事象をある一般的範疇に属する例としての転換
- e. 推測による結論
- f. 予測

これらは各人が持つ基本的な人間観である。<sup>3</sup>

### 4. 相貌とパーソナリティー

相貌とパーソナリティーについての研究は、Secord 他 (1956) によって次の5つが挙げられている。

- a. 時間的拡張 (他者の一時的特徴を永続であるかのように推測する傾向)
- b. よく知っている人からの一般化 (過去によく知っている人と類似した容貌を持つ人は、そのよく知っている人と類似した特性を持つものと仮定する傾向)
- c. 範疇化 (あるカテゴリーが一定の人物特徴と結びついているときに、そのカテゴリーに入れられた人はすべてそのような特徴を持つものとする傾向)
- d. 機能的推論 (顔の特定の部分が特定の機能を持つことから、その部分の容貌上の特徴によって、パーソナリティーを推論する)
- e. 隠喩的推論 (容貌上の特徴とパーソナリティーの特性の間にある種の類推を働かせることによって一般化する傾向)

このようなことはある特定の文化の中では共通する面を持っていることもあるが、経験に基づくものであるから、個人差も大きい。<sup>4</sup>

### 5. 対人認知のゆがみ

対人認知において判断の誤りを起こさせる要因として、Bruner 他 (1954) は、次のような4つを挙げている。

- a. 光背 (後光) 効果 (halo effect)

ある1, 2の特徴について、よい (悪い) 印象を受けると、その他の特徴についても不当に高く (低く) 評価するような傾向。

- b. 論理的過誤 (logical error)

個人的な経験から一般化して、A という特性は B という特性を伴うと見るような傾向。先入観や論理的類推から犯す誤り。

c. 投射 (projection)

自分の持っている特性や欲求を、無意識的に相手の特性や欲求だと判断する傾向。

d. 寛大効果 (leniency effect)

相手の好ましい特性は、いっそう好ましいと評価し、好ましくない特性はそれほどひどくないものと寛大に評価する傾向。<sup>5</sup>

## V まとめ

以上説明してきたように、現在における対人関係の認知については、その認知過程について重点がおかれた研究になっている。すべてにおいて、対人関係の認識については、個々人が経験的に持つ特性によって決定されるものである。したがって、ここではむしろどのような経験がどのような影響を及ぼしているかということは明確にされていないのである。しかしながら、ここで考えなければならぬのは、「対人認知においてはその個人の経験が大変重要」なことである。つまり経験というのは生まれてから起こっているものであって、決して乳幼児期とは無関係ではない。後は、経験がいかに学習されたり、記憶されたりすることとかかわってくるのかである。つまりそれがピアジェなどという「認知発達」と重要なかかわりを持ってくるのである。人間の経験が認知発達、記憶や認識そして言語などの発達と重要な関係があるということである。ここで重要なことは、乳幼児期における経験が対人認識において否定的なイメージを持たせることになるということである。このことは、Allport (1955) が『偏見の心理』(1961) において説明しているように、人間の持つ「同調性」にあると考える。<sup>6</sup> 特に、乳幼児期における社会性の発達に伴う社会への同調過程においては、社会における対人関係の否定的なイメージを認識しているのではないかと考える。したがって、これまで述べてきた対人関係の研究において欠落していることとしては、乳幼児期における対人関係がどのように影響を与えているかである。つまりここから乳幼児期における対人関係の認知がどのように発達していくかについて考えていかなければならない。その場合において、乳幼児期においては「同調」が重要な役割を担っていると説明した。乳幼児期における「同調」は、両親をはじめとする保護者に対しての、「信頼関係」より発せられると考える。したがって、子どもにとってもっとも密接で、信頼関係を持った大人の存在が大きい。そのような大人に対しての「同調」が子どもに「価値観」を与えていくのである。したがって、乳幼児期の対人理解の要は、大人の対人理解の意識である。大人は、そのことを理解して、乳幼児と接していかなければならない。

### 註

- 1 藤永保・高野清純編集『幼児心理学講座 4 社会性の発達』 1975 日本文化科学社 pp. 94-95
- 2 水原泰介編『講座社会心理学 1 個人の社会行動』 1977 東京大学出版会 pp. 40-41
- 3 同上 pp. 44-45
- 4 磯貝芳郎『人間と集団・社会』 1986 勁草書房 pp. 30-31
- 5 同上 p. 30
- 6 G. W. Allport 著 原谷達夫・野村昭共訳『偏見の心理』 1961 培風館 pp. 244-251

## 参考文献

- Allport, G. W. *The Nature of Prejudice*. (1954). Perseus Books.
- Ash, Philip Psychology in labor relations (A symposium): I. Introduction. *Personnel Psychology* 17 (4), 1964, 361-363.
- Bevan, William, Secord, Paul F. and Richards, James M. Personalities in faces: V. Personal identification and the judgment of facial characteristics. *Journal of Social Psychology* 44, 1956, 289-291.
- Gage, N. L. & Cronbach, Lee Conceptual and methodological problems in interpersonal perception. *Psychological Review* 62, 1955, 411-422.
- Jones, E. E. & Bruner, J. S. Expectancy in Apparent Visual Movement. *British Journal of Psychology* 45, 1954, 157-165.
- Sabin, E. The individual and the forces of nature. *Philosophical Review* 29, 1920, 480-483.
- Warr, Peter B. & Knapper, Christopher *The Perception of People and Events*. (1968). Oxford, England: John Wiley & Sons.

(その ひろあき 初等教育学科)